PROJECT

アジア・アフリカの視野で日本の「近代化」を見直す

文・写真
川田順造

共同研究 ● 日本の「近代化」をアジア・アフリカ諸社会との比較で再検討する（2010-2013）

2010（平成22）年10月から3年計画で、民博の共同研究「日本の『近代化』をアジア・アフリカ諸社会との比較で再検討する」が発足した。私が呼びかけ人で代表者になってはいるが、国立民族学博物館の田村克己の尽力で実現し、運営されている共同研究だ。

この共同研究に先行して、人間文化研究機構のパイロット・スタディーとして、「ナショナル・アイデンティティーの多文化間比較」という共同研究を、私が呼びかけ人になり、16人のこの分野での最先端研究者を語らって3年間行った。この研究会では各発表に適宜外部からもコメンテーターを招き、そのうちの多くの方もその後の研究会に加わっていったので、研究発表と討議は多様化し、豊かになったが、研究組織としては拡散気味になった。当時東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所長だった故大塚和夫を報告者とする「イスラームというアイデンティティ」についての討議や、京都大学人文科学研究所の山室信一を報告者とする「大東亜共栄圏」をめぐる討論なども、このような顔ぶれの研究会でなければできないものだった。この研究会は2010年3月で終了し、報告書は2011年前半に山川出版社から刊行の予定だ。

源平でない下級武士が天皇親政を実現した明治維新のシンボル、建武中興の楠木正成の銅像は敗戦までいたるところにあったが、いまは全国でただ2つ。皇居前のもの（9ページ）は、1897（明治30）年に別子銅山開業200年を記念して住友吉左衛門が、別子産の銅を使い、美術学校の高村光雲らに委嘱して制作し、宮内省に献納した。正成が討死した湊川古戦場址の神戸市湊川公園の像（上）は、神戸新聞社が1935（昭和10）年大楠公600年祭に、帝国美術院会員齋藤素巖らに委嘱して建てたもの。いずれも重要美術品として、敗戦後の占領軍による撤去を免れた。

「ナショナル・アイデンティティー」は、多くの場合国民国家、つまり西洋近代に成立した政治社会のあり方と深く関わっており、非西洋社会のいわゆる「近代化」と重なり合うことが多い。この先行研究会の成果を受け継ぎながら、日本の「近代化」を、アジア・アフリカの視野で問い直す形で深化させようという意図で始められたのが、今度の新しい共同研究だ。

アジア・アフリカ諸国で、私たちはしばしば「日本は伝統文化を保ちながら近代化を果たし、欧米諸国を凌駕しさえしたが、それはどのようにして可能だったのか」と訊ねられる。私はそれを、現実と一致しない神話だと思う。日本の「近代化」は多くのゆがみを引きずって成立したもので、とくに太平洋戦争にいたる経過は、そのゆがみが拡大されてアジアの近隣諸国にも日本自身にも大きな禍（わざわい）をもたらした。

明治維新以来「近代化」された大日本帝国が、このような災厄を内外に及ぼした果てに、成立後77年で崩壊した事実から見ても、日本の「近代化」が、けっして肯定的にだけ評価されえないことは明らかだ。アジアの一国である日本が、現在以後の世界で、多くの面で立場を共有するアジア・アフリカ諸国に立ち交って、どのように自らを位置づけて行くか、政治・外交・経済・文化など、現実に対応を迫られている領域における諸問題を考える上での、広い視野に立った認識が、いま問われている。

このような問題意識で日本の「近代化」を考察するのに、アジア・アフリカ諸社会の視点から問題を考えることができるくらい、これらの社会の文化、歴史に精通した研究者、ないしはこの課題を理論的に検討する視点をもつ研究者と共に、今度は参加者の範囲を進行に伴って拡大せず、集約的に討議を深化させて行くというのが、この共同研究の基本方針だ。そのため、前述した先行研究会のメンバーだった方も含めて、互いに研究者として知り合っているような方々に呼びかけ、すでに他の共同研究に加わっていて時間の余裕がないという理由で辞退された1人を除いて、声をかけた16人の方すべてが参加を快諾して下さった。

五十音順に、敬称略でお名前と現在の所属機関名を、私も含めた17人について以下に挙げる。

伊藤亜人（早稲田大学アジア研究機構）、臼杵陽（日本女子大学文学部）、勝俣誠（明治学院大学国際学部）、金子正徳（京都文教大学）、川田順造（神奈川大学日本常民文化研究所）、栗本英世（大阪大学大学院人間科学研究科）、桑山敬己（北海道大学大学院文学研究科）、小長谷有紀（国立民族学博物館民族社会研究部）、佐々木史郎（国立民族学博物館民族社会研究部）、清水展（京都大学東南アジア研究所）、田村克己（国立民族学博物館民族社会研究部）、濱下武志（龍谷大学国際文化学部）、古田元夫（東京大学大学院総合文化研究科）、三尾裕子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）、水島司（東京大学文学部）、宮崎恒二（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）、吉澤誠一郎（東京大学大学院人文社会系研究科）。

第1回研究会は、2010年11月21日、国立民族学博物館で行われ、研究代表者として川田が問題提起を行った。その要旨を次に記す。

日本の「近代化」を、アジア・アフリカ諸社会との比較で再検討するためには、「近代化」を広義に考え、いわゆる戦後民主主義の時代から高度成長にさしかかる1960年代前半までを含めた方が、意味があるのではないか。そのために日本の「近代化」を、前期と後期に分けることを提案したい。つまり薩長主導の明治維新による、神格化された天皇親率の軍隊をもつ大日本帝国の形成と、77年後のその終焉までを「日本近代化前期」として捉える。そして日本占領軍最高司令官マッカーサー元帥が、人間宣言をした昭和天皇以上の権力をもって日本に君臨していた1945年から、1951年サンフランシスコでの部分的講和条約での独立回復を経て、池田首相の所得倍増政策下での、ヨーロッパとも連動する、大幅な生活電化時代を迎えるまでの約20年間を、「日本近代化後期」として位置づける方が「近代化」を問題にする上で、アジア・アフリカ諸社会との対応関係を作りやすいのではないだろうか。

第一、現人神（あらひとがみ）天皇のもと、記紀万葉の世界に由来する金鵄勲章や防人（さきもり）のイメージが支配し、『太平記』種（だね）の楠木正成が神社に祀られていた社会が、「近代化」された社会だったと言えるのかどうかも、問い直されなければならない。日本の「近代化後期」には、「民主的」という肯定的価値観に対して、敗戦までの日本を支配していた価値観は、しばしば「封建的」と呼ばれて否定された。

「日本近代」の形成を、アジア・アフリカ諸社会と比較可能な視野で検討するための、予備作業が必要だ。理念としての「近代」、時代区分としての「近代」、「近代」と「現代」を考えると、いずれも、フランス、ドイツ、英国など、ヨーロッパでも国によって著しく異なることをまず理解すべきだ。

アジア・アフリカの大部分の社会にとって、尊皇攘夷で揺れた日本も含む19世紀後半は、18世紀末に独立したアメリカ合衆国と、欧化政策を進めたピョートル大帝以後のロシアにまで拡大された「西洋」の列強による植民地支配が進められた時代であり、大日本帝国が終わった1945年は、その日本も含む世界の植民地帝国が崩壊して、とりあえず植民地が解放された年だ。

だからといって、植民地支配から解放されたアジア・アフリカ諸社会が、すぐ主権国家として独立できたわけではない。アジア諸社会は全般に早く、インドネシアは日本降伏と同時に1945年8月に独立。フィリピンは1946年7月に独立し、1947年8月にはインドとパキスタンも分離独立を達成した。

だがアフリカ諸社会は、19世紀末の西洋列強の力関係を反映した極めて人為的な植民地分割の後遺症もあって、戦後独立を最も早く達成したのは、パン・アフリカニズムを掲げたクワメ・ンクルマの率いるガーナ共和国の1957年3月、次いでフランス共同体から離脱した、セクー・トーレのギネーの1958年10月だった。他のかなり多くの国が1960年に独立し、アフリカの年ともいわれた。つまり独立国としての主体的な「近代化」の推進は、時期としては「日本近代化後期」の終わりから始まったと言える。

明治維新に始まる「日本近代化前期」は、19世紀後半の、拡大された「西洋」が作っていた「万国公法」に基づく国民国家への仲間入り、高給で招いた「お雇い外人」や派遣留学生など、少数エリートを通しての主体的間接的「非一国西洋」の摂取によって実現された。これらの点で、西洋の一国の、少数エリートよりは多数の軍人・官吏・商人等によって、直接、非自律的に支配された、アジア・アフリカの多くの社会とは、著しく異なっている。

さらに、脱亜入欧、和魂洋才のスローガン、吉田松陰の『幽囚録』に述べられている、アジア近隣地域への進出の教えを実行した弟子たち（伊藤博文、山県有朋など）の主導による、東アジアの植民地化を通して、日本の「前期近代」は実現された。この過程をアジア・アフリカ諸社会と比較可能にするためには、これらの特徴をより簡潔に、より一般化された概念によって捉え直す必要がある。

日本の近代化前期の国民教育において、過去から取ったメタファーが用いられたが、その3つ（楠木正成、記紀万葉の世界、赤穂義士）について、川田報告では分析した。

第2回研究会は2011年1月30日国立民族学博物館で、臼杵陽の「大川周明、イスラーム、天皇」をめぐる報告に、永渕康之をコメンテーターとして行われた。

かわだ じゅんぞう

日本民俗学への関心から、大学では文化人類学を学び、日本と思い切り違う文化に惹かれて西アフリカで学び、アフリカ研究と人類学の理論研究のために留学したフランスで、田舎も歩き職人の調査をした。東西に南の視点を加えた「文化の三角測量」を志しているが、道は遠い。